

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730484

研究課題名(和文) インドネシアにおけるゲートッド・コミュニティについての地域社会学的研究

研究課題名(英文) A study of gated community in Indonesia from the viewpoint of regional and community studies

研究代表者

菱山 宏輔 (Hishiyama, Kosuke)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：90455767

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：従来、GCについては米国における研究が先行し、富裕層が地域社会から離脱し、隔絶した生活環境をつくるものとされた。しかしながらバリ島においては、内外の流動性を一定程度保持し、重層的なセキュリティを担保する「ゲート空間」が構築されていた。これは、バリ島における伝統的に居住区域において門が重層的な意味空間を成し、公共性を保持する空間的特質をもってきたことの延長に位置付けられる。もっとも、近年では、バリ島の文化的意匠に市場価値をもたせたいっそう排他的なGCも現れており、両者の分水嶺とその条件についてはいっそうの研究の展開が必要とされる。

研究成果の概要(英文)：Preceding studies of Gated Community have been developed on the cases of the United States. They have clarified the withdrawal of the rich from local society and the character of isolated society and environment. In those cases, Gate has been evaluated as a boarder. However, in Bali, this research found the "Gate as a space". It can keep the pluralistic security and the fluidity between inside and outside. Such characteristics is able to be referred from the historical role of the gate in front of traditional Balinese house. It has made pluralistic semantic and public space. However, these days, Balinese culture is installed in the designs of houses even in Gated Community and they make high market value. Next research regarding the condition of a watershed between public and market value will be needed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ゲートッド・コミュニティ インドネシア バリ 空間 流動性

1. 研究開始当初の背景

これまでゲートッド・コミュニティ(以下、GC と略記)に関する研究は、米国の事例を中心に、Blakely&Snyder (1997=2004『ゲートッド・コミュニティ』)をはじめとして、GC の類型化・検証というかたちで進められてきた。その際、特に、市場の影響、個人化、地域社会や地方政府からの離脱、Home Owner Association の管理手法が着目され、自律性あるいは閉鎖性について論じられた。現在では研究領域が広域なものとなり、米国の不動産市場の影響力を相対化し、国家社会住宅や居住の歴史への配慮を特徴とするヨーロッパ(オランダ)のGC (Aalbers 2003 “The double Function of the Gate”)、高い流動性や地元社会との格差が特徴となるインドネシア(ジャカルタ)のGC (Leish 2002 “Gated Communities in Indonesia”)についての研究などがみられる。

日本国内においては、五十嵐(2004『過防備都市』)、佐幸(2006“ 囲われる空間のパラドックス ”)、竹井(2007『集合住宅と日本人』)等に GC への言及がみられる。しかし国内の先行研究の多くは、監視カメラの設置をはじめとした安全・安心まちづくりに着目して空間の変容や危機を論じるものであり、GC そのものについての議論は比較的手薄である。

国内の研究における海外の事例への言及としては、米国のものに終始する場合がほとんどである。これらの理由として、従来日本の地域社会ではさまざまな属性の住民が隣接して居住し、格差も小さく、GC 形成そのものにリアリティがなかったことがあげられよう。

とはいえ、近年、縮小都市政策ならびに郊外の空洞化と軌を一にした都心部再居住の傾向にあって、居住動機としてセキュリティ対策が注目される状況に呼応しつつ、高セキュリティ型集合住宅の開発が進んでいる。それは往々にして、当該住宅居住者のみが利用可能な公園施設やレクリエーション施設のパッケージ化を伴うものでもある。このような文脈のもとに公共空間の危機が論じられており、日本型 GC の特徴となりつつある。

以上の背景とともに、今日、持続的発展や市民社会論において多様性や公共性の確保という問題が重要性を増す中で、GC を巡る状況についての議論の深化が必要とされる。そこで、本研究課題は、インドネシアの地域社会に内包される流動性や共同性の重層的な特徴に着目し、そのような特徴がゲートや壁を越えて浸透している状況を出発点として、新たな GC の特徴を把握しようとするものであった。そこから可能となる集住形態、GC に関わるセキュリティの技術がもつ特殊・普遍性を明らかにし、その応用可能性を検証することが当初の背景であった。

2. 研究の目的

本研究課題は、インドネシアの GC の特徴を明らかにし、社会的流動性を伴う GC の有効性と応用可能性を検証することを目的とした。現在、地域社会における安全・安心への関心は、世界的な高まりをみせる。その中で、GC を巡っては地域自治の一形態とされながらも、地方行政との隔絶や排他性という特徴から、公共空間の危機までもが論じられる。本研究では、インドネシア・バリにおいて、社会的流動性の排除ではなく制御や担保の側面に着目し、公共性を再形成し得るセキュリティの技術としての GC の可能性を明らかにしてきた。

3. 研究の方法

研究の方法として、研究期間内において、以下、五つの対象から三つの研究領域を設定した。

「1) - 1 社会的流動性の制御を担う領域」として、「a. 政府機関」に着目し、住宅地域開発の制度的側面として、その計画(都市計画)、情報提供、許可の状況を把握した。すなわち、それぞれの役割を担う政府機関である BAPPEDA、Dinas Tata Ruang、Dinas IMB の一次資料収集を行った。

「1) - 2 社会的流動性の制御を担う領域」として「b. ディベロッパー」に着目した。近年、多くのディベロッパーは、Tana Kapling という開発、すなわち区画一括購入後に開発計画のみの参照によって分譲を行っており、地元住民との折衝や区画の管理問題を通して、GC の特質決定の最初の段階に大きな役割を担い始めていた。そのため、研究領域の一翼として重要な観点となった。

「2) 社会的流動性と制御の間の領域」として、「GC 内住民」に着目した。GC の開放性や流動性が最終的に決定される領域である。住民は様々な諸力のうえに、GC をどこまで開放的・流動的なものにするか、GC 内環境維持にどれほど関心をもつのかという選択に立たされる。そこで形成される組織も、懇親、代理、自治といった要素を様々な担う。この領域の詳細な検討が GC 研究の中心となった。

「3) - 1 社会的流動性を担う領域」として、「a. GC 周辺住民」に着目し、GC 内への社会的流動性を主に担う領域として位置付けた。GC の近隣区画では、当の GC がいかなる性格のものかによって GC との関係を変化させていると想定された。特に、治安維持活動の分担や役割、寄付金や相互扶助活動といった点で、GC に様々な影響を与え、社会的流動性を担い付与する領域として着目した。

「3) - 2 社会的流動性を担う領域」として、「b. 労働者」について、GC 内への社会的流動性を一部担う領域として着目した。GC 内の住民サービス、ガードマン、造園、清掃・

ゴミ処理は外部業者に委託される。対象地区に関する申請者の先行研究によれば、ガードマンを巡っては、企業、周辺住民、ディベロッパー等の諸力によって流動的な性格が付与される。このため、GCの特徴を表すうえで看過できない領域であった。

以上のように設定された領域を各年度にふりわけ、実際の現地調査を行った。

平成23年度には、GCに関する理論研究において、米国の事例と枠組を橋頭堡に、後の事例研究と枠組の応用・修正の状況を把握するために、西欧（オランダ）、ジャカルタの事例を比較検討した。これにより、東南アジアのGCを分析する枠組として、空間的移動と流動性についての議論をとりいれる可能性を導くことができた。その延長に、インドネシアの事例分析への応用のために、特に英国において発展を見せしている空間的移動に関する社会理論に着目し理論研究を行った。以上から、GCを規範的な立場から批判するコミュニティ論をこえて、GCの新たな類型とともに、現代のコミュニティを積極的に評価する視点を注するための観点を得た。

あわせて、GCに関する一次資料収集を行った。Dinas IMB（デンパサール市許認可局）において各年次の建て売りの状況についてのデータ、Dinas Tata Ruang（デンパサール市都市計画局）においてはデンパサール市の都市計画と、地域規制計画、土地用途の違反状況についてのデータを入手した。統計局においては、住宅造成状況に関する統計データを入手した。さらに、特定のGCにおいて、ディベロッパーの従業員かつ住民のリーダーに該当する人物へのインタビューを行い、住民への情報提供の詳細、運営状況などよりミクロなデータを入手することができた。このことにより、分析枠組と、次年度以降のアンケート調査の設計の妥当性をより明確なものとすることができた。

平成24年度には、GC内の住民属性を把握するためのアンケート調査、GC周辺住民についての調査を予定した。しかしながら、バリ島にて開催された国際会議での報告依頼に対応するため、予定の一部は繰り越されたものの、質疑応答等を通して、自らの研究の位置付けをより明確なものとすることができた。現地調査としては、中心的な調査対象となるGCの住民会議に出席し、議題や出席者の様子、議論の進め方から、質的な側面でのGC内住民の把握を行うことができた。同時に、GC内住民の属性、ガードマンの雇用やインフラ整備の状況、ディベロッパーからの書簡などについて、地区長から詳細なデータの提供を受けた。

冬期の滞在において、当初夏期に予定したアンケート調査を実施した。住民の属性については地区長から提供を受けたデータをもとにすることができたため、調査内容は安全・地位・レクリエーションというみつつのSocial Valueを基軸に、住民の生活や住環境

に対する認知的側面に重点をおいた。

平成25年度には、社会的流動性を担う領域に着目し、中規模GCにおいて、ガードマン、造園、清掃・ゴミ処理の委託状況について、委託を受けている当人、住民、地区長に対してインタビュー調査を行うとともに、関連する一次資料収集を行った。

4. 研究成果

最も大きな研究成果として、「幅のあるゲート空間」概念の構築に至ったことである。それは、セキュリティにおいてガードマン、警察、近隣の自警団といった要素を内部に呼び込み、多層化されたものであり、内部住民においては外部環境に関心を払うものであった。ガードマンの行き来によってGCの内部と外部の交流を促すゲート空間が導かれていた。こうした状況から、バリ島型のGCの一部に特徴的あることとして、外部からの不安定要素の流入に対して、それらを完全に遮断し排除しようとするのではなく、ゲートから路地を抜け大通りまでの幅をもった緩衝地帯として、いわばバリ島の伝統的家屋に据えられた門にも似た「幅のあるゲート空間」が見いだされることで、むしろ流動的・多層的な性質をあわせもつかたちで対処するしくみが明らかと成った。

これは、米国を中心としたGC研究が批判に終始する状況に対して、むしろ肯定的な社会構成の可能性を提示したという点で大きな貢献であるといえ、さらに、閉塞する地域社会一般において、流動性やモビリティ、モータリティという観点から新たなコミュニティ像を提示し得たという点でも貢献するものであるといえる。

ここから派生した今後の研究発展の可能性として以下の二つをあげることができる。第一に、GC内部においては、「管理のグレーゾーン」の存在から、地域共同管理方式のひとつの形態として研究の発展可能性を導くことが出来た。従来のGC研究において、GC内部では極度に個人化が進行し、関係をもたないか、ディベロッパーが介在するか、Home Owner Associationによる結合に限られるかという議論が主流である。しかしながら、バリ島におけるGCにおいては、個人宅とGC内の共有スペース（インフラ）との間、管理が不十分な箇所をどのように補完するのかにより、GC内での生活様式に分水嶺が生じている可能性がある。

第二に、GC内に日本人長期移住者が居住している事例を複数確認し、GCに居住する（ライフスタイル）移民という新たな現象として研究の発展可能性を導くことができた。従来のライフスタイル移民研究とは異なる個人化の様式、生活環境のコントロール、職業生活における高い専門性など、新たな特徴が散見されており、今後、これら着目した詳細な研究が必要とされよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

Hishiyama, Kosuke, Globalization and Gated Community in Bali: A Comparative Study, The 11th Asia Pacific Sociological Conference, October 23, 2012, Ateneo de Manila University, Quezon City, Manila, Philippines

Hishiyama, Kosuke, Local Security and Globalization in Bali: Three Case Studies, Bali in Global Asia: Between Modernization and Heritage Formation, July 18, 2012, University of Udayana, Denpasar, Bali, Indonesia

菱山宏輔、融合研究所での経験と将来の融合研究、東北大学国際高等研究教育機構研究交流会、2011年10月23日、東北大学

菱山宏輔、インドネシア・バリ島のツーリズムと地域治安維持活動の展開、西日本社会学会第69回大会、2011年5月21日、島根大学

菱山宏輔、バリ島におけるゲートド・コミュニティの展開-欧米との比較と流動性の調整の観点から、地域社会学会第36回大会、2011年5月15日、山口大学

〔図書〕(計 3 件)

菱山宏輔、移動とリスク・セキュリティの多層的風景、人の移動事典・日本からアジアへアジアから日本へ、丸善出版、分担執筆、2013、346-347

Hishiyama, Kosuke, Community and Regional Security in the Immigrant District of Bali Island, Stratification and Inequality Series, Volume 14, Global Migration and Ethnic Communities: Studies of Asia and South America, Trans Pacific Press, 分担執筆、2012、84-105

菱山宏輔、ゲートを超えるバリ島のゲートド・コミュニティ、移動の時代を生きる-人・権力・コミュニティ、東信堂、共編著、2012、209-247

6. 研究組織

(1)研究代表者

菱山 宏輔 (HISHIYAMA, Kosuke)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：90455767